五十九期（士59期 経859期）

担当者
二世
神保　明生

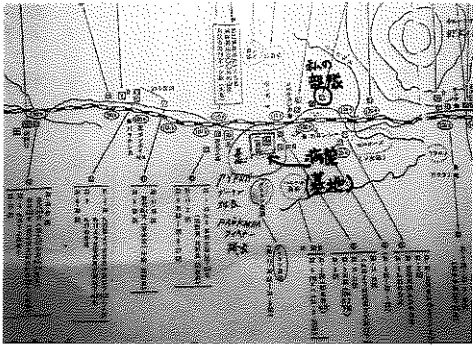
シベリア抑留の思い出

二宮善四郎（33／2航襲）

寒くなるとシベリアの大平原を思い出す。抑留地シベリアは昭和20年当時は全くの密林、ツンドラ地帯で、日本人抑留者20数万人が4年間人力で開拓した。冬は零下十数度の屋外の寒さに、夏はブヨに悩まされた。4年間の抑留生活を終えて帰路の貨車に乗車した時、若くて美しい女の先生が数名の児童と一緒に見送りに来られ「ご兄弟姉妹、ご両親の許に悉なくお帰り下さい」と手を振り見送って頂いた。この瞬間今までの苦しい事が吹っ飛んでしまった。この若い女の先生は、最後の日本人引き揚げ者である我々

に感謝の意を表してくれたと思う。我々はロシア語は仕事に関する言葉から必要に追られて自然と解するようになっていた。左は日本人部隊の展開図の一部である。私はウラウダ河南の敦化245大隊富田陸郎少尉の指揮下に居た。

同期の横田清史君（26／1航襲）は昭和20年、芦澤正名君（31／1航襲）は昭和22年に病死され基地に埋葬された。平成3年9月に私はシベリア墓参旅行で数



カ所廻り、中には白骨の露出した原野もあった。イルクーツクの日本人墓地で昭和62年8月31日私の住む福岡県の知事奥田八二氏の卒塔婆を見つけた時は、有り難くて自然と涙が込み上げて来た。奥田知事は社会党出身でオリンピック、モスクワ大会に出席した帰路、シベリア最大の都市イルクーツクの墓地に参拝されたと推察する。この私の旅行で我が人生に一区切りついた気分になった。シベリアの地に望郷の念空しく果てた同胞の霊に合掌するのみである。現在私は元気で毎日五千歩ほど散歩している。